

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

品種分化をめぐる：バナナの商品化と品種多様性：  
インドネシア・南スラウェシの事例から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小松, かおり メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00001157">https://doi.org/10.15021/00001157</a>

## バナナの商品化と品種多様性 — インドネシア・南スラウェシの事例から —

小松 かおり

静岡大学人文学部

東南アジアはバナナが栽培化された地域であり、各地で非常に多品種のバナナが栽培されている。しかし、輸出用のバナナはほぼキャベンディッシュー品種に限られる。一方、国内の市場では、在来の品種が流通しているが、大都市では限られた品種のみが流通する。

本稿では、品種多様性の高い作物が、生産地から市場に流通する過程でどのように品種多様性を減少させるのかを、インドネシア・南スラウェシのバナナを通して考える。

調査の結果、バナナの流通ルートには、近隣の市場向け、地方中核都市向け、州都向けに独立した3ルートがあり、生産地と消費地の距離の遠いルートほど品種の多様性が減少すること、品種の減少には、有名品種のみが選択される方法と、品種の名称が変換される方法があることがわかった。これらは、生産者と消費者の知識の違いの上に成り立っており、生産者と消費者の知識の共有が、品種の多様性を守る鍵である。

- |                   |                |
|-------------------|----------------|
| 1 田舎のバナナ文化と都会の市場  | 5 バナナの3つの流通ルート |
| 2 バナナという作物        | 6 品種名の分布と流通    |
| 3 南スラウェシの農業とバナナ生産 | 7 商品化と品種多様性    |
| 4 各地の市場と風景        |                |

\*キーワード：バナナ・商品化・品種多様性・スラウェシ

### 1 田舎のバナナ文化と都会の市場

インドネシアのスラウェシ島西スラウェシ州<sup>1)</sup>に、マンダールの人々が暮らしている(図1)。マンダールは、サンデという白い小型の帆船を操って近海で営む漁業を主生業とするが、周囲の人々からは「バナナ食い」としても知られている。インドネシアは最近まで、アジア起源のサゴヤシや、キャッサバ、サツマイモ、ジャガイモ、トウモロコシといったアメリカ起源の作物を主食としてきたが、国を挙げた稲作の推進もあり、近年では、多くの地域でコメが主食となっている。マンダール地域も同様で、1999年の調査当時、朝・昼・夜の正式な食事ではコメが主食として供された。しかし、この地域は最近まで、バナナが重要な主食だった。1994年の調査記録に、漁村での主食がバナナとココヤシスライスをバナナの葉で包み、蒸し焼きしたものと焼き魚だったが、今はコメが増えている、とある(古川 1996)。畑でココヤシやカカオと混作されるほか、家

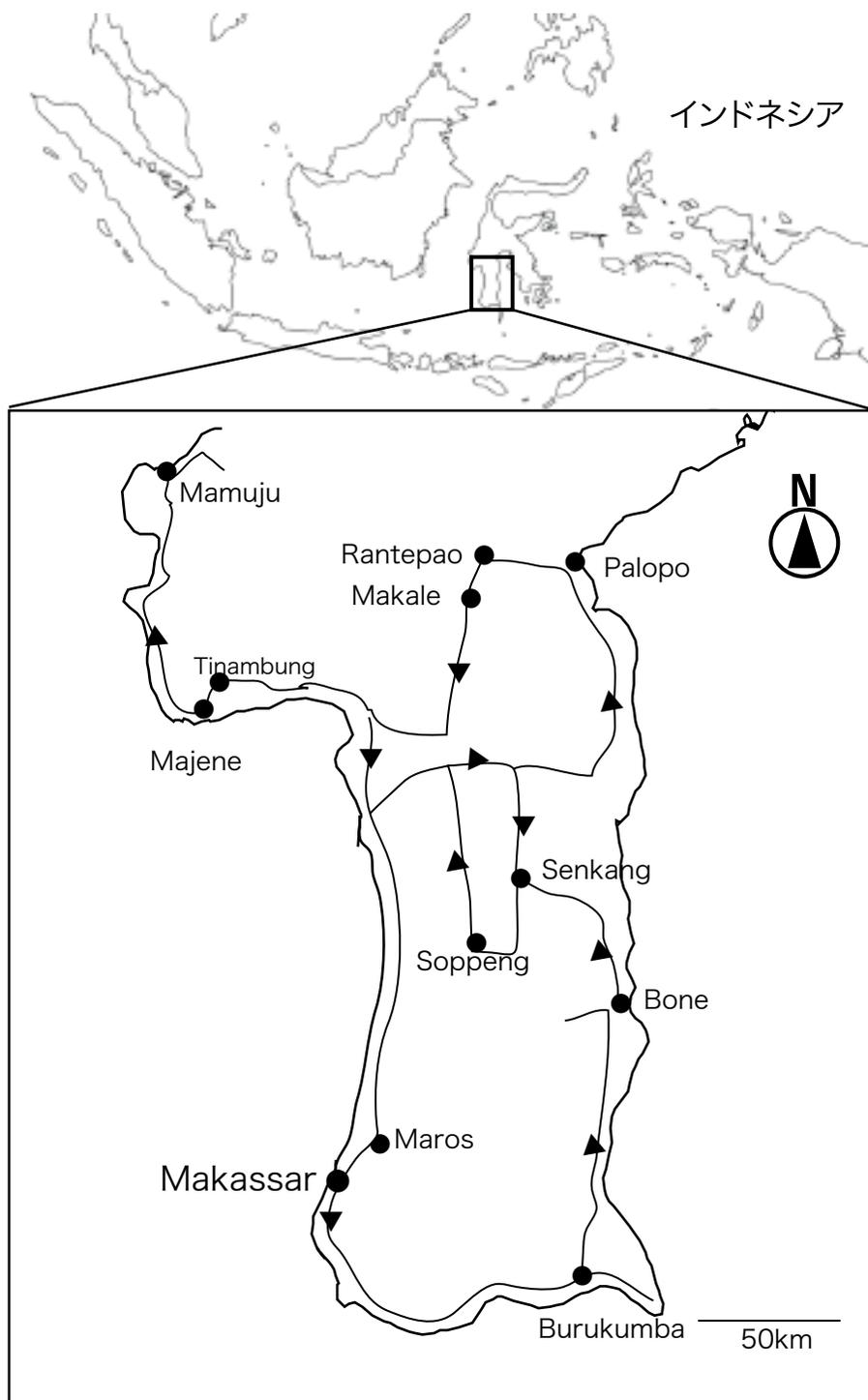


図1 調査地のミナミスラウェシ州（州都はマカッサル）と調査ルート  
 ※▲マカッサルを起点とする調査ルート

の周囲にもたくさんのバナナが植えられているのが普通で、家の周りのバナナは食べ物としてだけでなく観賞用の役割も果たすらしく、めずらしい品種が多く見られる。

マンダールのバナナ文化の特徴は、数週間の調査で38品種が観察された多品種の存在と、儀礼への利用を含む多様な利用法だ。

マンダール語でバナナはロカ (*loka*) と言い、それぞれの品種は、ロカの後ろに形容詞をつけることで表される。マンダール地域でならどこでも見られ、ほぼすべての市場で売っている5種類の基本品種、料理用のロカ・マヌルン (*loka manurung*) とロカ・バランバン (*loka balambang*)、生食用のロカ・ロカ (*loka loka*)、ロカ・ティラ (*loka tira*) とロカ・バランガン (*loka barangang*)。それに加えて、山間部に多い品種、海岸沿いに多い品種、特定の村にしかない品種など、さまざまな分布を持つ品種があった。マンダール地域には、海岸沿いに幹線道路が走り、ところどころに週に2度程度の定期市が立つ。よほど小さな市場を除けば、通常、各市場には7から9種類の品種が並んでいる。マンダールの市場全体では、13品種が観察された (写真1)。

焼きバナナや揚げバナナなど軽食として利用されるほか、保存用の干しバナナ、主食用のバナナペースト、各種の蒸し菓子など実の利用は非常に洗練されていた。そして、雄花序を和え物にしたり、葉を調理用具としたり、実以外も利用される。また、バナナは各種の儀礼でも重要な役割を担う。儀礼の供物にはバナナが欠かせない。新築の家には、強さを表すココヤシ、楽しみを表すサトウキビと合わせて、日々の糧の象徴としてロカ・マヌルンが供えられる。イスラムの各種儀礼にもバナナは欠かせない。同じ個体でも先端部に近い小さい果掌の方がおいしいといわれ、「もし人々が、(根本に近い大きい果掌と先端部の小さな果掌を取り違えるように) 不適格な人を不適な地位に据えるなら、どうして世界が壊れずにいられるだろうか」という意味のことわざがある。めずらしい品種に対する人々の関心は高く、めずらしいバナナを見たい、というリクエストに、あの村のあの場所に、という情報が次々と入ってきた<sup>2)</sup>。

このような豊かなバナナ文化に接したあと、南スラウェシ州の州都、マカッサル (Makassar) でバナナを商う市場を観察すると、違和感を感じた。南スラウェシ全体からバナナが集まっているはずのこの市場では、品種数が少ないのだ。規模が圧倒的に大きいマカッサル中心部の市場では、6品種しか見つからなかった。小・中規模の市場ではさらに3品種が見られたが、結局、マカッサルの市場全体で9種のバナナしか見られなかった。マカッサルで中心的な品種は、インドネシア語で、ピサン・ラジャ (*pisang raja*、マンダールのロカ・バランバン、料理用)、ピサン・ケポック (*pisang kepok*、同ロカ・マヌルン、料理用)、ピサン・アンボン (*pisang ambon*、同ロカ・ティラ、生食用)、ピサン・スス (*pisang susu*、同ロカ・ロカ、生食用)、ピサン・ダディ (*pisang dadi*、同ロカ・ダディ、生食用)、ピサン・ロンボ (*pisang lompo*、同ロカ・レロ、料理用) であった (写真2-7)。ピサン・ダディとピサン・ロンボがマンダールでは一

一般的でなく、マカッサルではロカ・バランガンがほとんど見られない以外は、マンダールの標準的な品種と同じである。しかし、マンダールの市場で見られた、標準的な品種以外の多様性は、マカッサルの市場ではどこに消えるのだろうか。

マカッサルのバナナは、南スラウェシの全体から入荷している<sup>3)</sup>。南スラウェシには、品種はどのように分布しているのだろうか。生産地からマカッサルまで、バナナはどのように移動し、その中で品種はどのように変化するのだろうか。マカッサルの市場では、品種はインドネシア語で呼ばれているが、地方ではどのように呼ばれて、マカッサルに来るまでにどのように名前が変化するのだろうか。マンダール地域で見たバナナの品種の多様性と、マカッサルの市場の品種の少なさのギャップは、バナナの商品化や流通と関係するのではないだろうか。

## 2 バナナという作物

バナナは、栄養体繁殖する多年生草本で、バショウ科 (Musaceae) バショウ属に属する複数の野生植物から栽培化された。栽培バナナは、単為結果性をもっているため、種子からではなく栄養体から繁殖する (図2)。食用バナナの多くはムサ・アクミナータ (*Musa acuminata*) とムサ・バルビシアーナ (*Musa balbisiana*) の2種の野生種のどちらか、もしくは両方を祖先とする。栽培バナナは、ムサ・アクミナータ (AA) とムサ・バルビシアーナ (BB) のゲノムの組み合わせにより、AA, AB (2倍体), AAA, AAB, ABB (3倍体) などと表される<sup>4)</sup>。

北緯30度から南緯30度までの広い地域で栽培され、広範囲な気象条件に適応している。最適な栽培条件は、明瞭な乾季を持たず、降水量が2,000ミリメートルに近く、月間降水量が75ミリメートルを下回る月が3ヶ月以上ない地域である。また、結実期の平均気温は29℃から30℃が望ましい (Stover and Simmonds 1987)。マンダールの居住地域では、降雨型は明確に異なる3つの区域に分かれる。北西から南東に延びる地域の中で、北西部と南東部は年間降水量が2,000ミリメートルを超える多雨地帯だが、中央部の一部の地域では、1,500ミリメートル以下のところもある。しかし月間降水量が75ミリメートルを下回る月が3ヶ月以上のところはなく、バナナ栽培の条件は満たしている。南スラウェシ全体でも、ほぼすべての地域で栽培条件を満たしている (古川 1982)。

野生のムサ・アクミナータが、突然変異により、単為結果の種なし果実となったのがアクミナータ系2倍体の栽培種 (AA) の起源である。その起源地は、一般的には、マレー半島周辺と考えられている。これは、野生のムサ・アクミナータの自生地分布中心がマレー半島であること、この地域のアクミナータ系のバナナの品種多様性の高さなどから推測された結果である。これらのアクミナータ同質2倍体を元にして、その同質3倍体 (AAA) や、インド北東部、フィリピンなどに自生するバルビシアーナとの交



写真1 Tinambung の定期市で、ある日に観察した10品種



写真2 *Pisang susu (loka loka)* AA 生食用



写真3 *Pisang dadi (loka dadi)* AA 生食用  
*susu* に似ているが先端が曲線。



写真4 *Pisang ambon (loka tira)* AAA 生食用



写真5 *Pisang raja (loka balambang)* AAB  
生食用/料理用



写真6 *Pisang kepok (Ioka manurung)* ABB  
料理用



写真7 *Pisang lombo (Ioka lero)* ABB 料理用  
*kepok* に似ているが大振り。



写真8 地域市場にバナナを搬入するベチャ

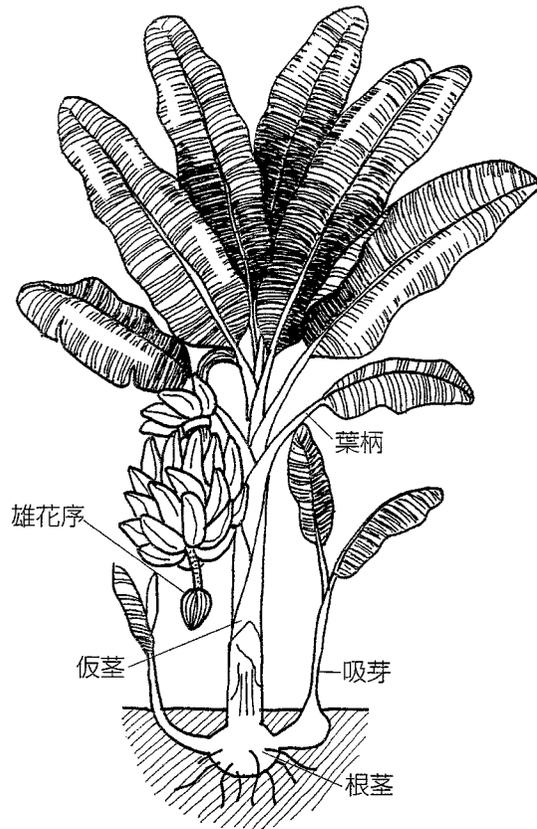


図2 バナナの植物体

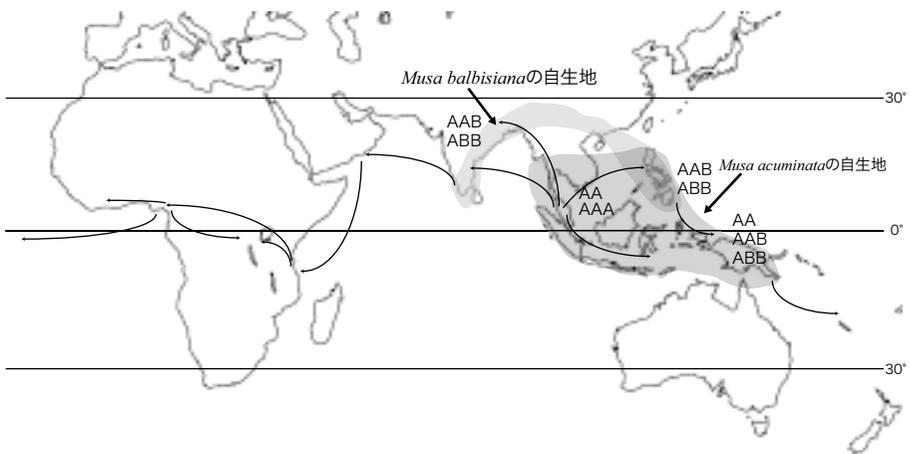


図3 ゲノムタイプの変異と主要な伝播ルート  
 中尾 1966; De Langhe & De Maret 1999参照。  
 ゲノムタイプの表記は、その場所で生み出された可能性の高いゲノムタイプ。

雑系統（AB, AAB, ABB など）が生みだされた。その後、西はアフリカへ、東はニューギニア、太平洋の島々へと広がり、大航海時代までに、アメリカ大陸を除く湿潤な熱帯・亜熱帯の各地に拡散した（図3）。東南アジアでは、AA, AAA, AAB, ABB, AB, ABB, BBB などゲノムタイプのほとんどのパターンが多くの地域に分布している（Stover and Simmonds 1987; Valmayor *et al.* 2000; 小松ほか 2006）。

同じゲノムタイプのバナナの中でも、形質には突然変異によって起こったさまざまな変異が見られる。長い間バナナを栽培してきた人びとは、形態、味覚、結実期などの微細な差異も見分けてそれらに方名を付与してきた。本稿では、「品種」という用語を、遺伝的に安定で農学的に確立された分類としてではなく、栽培や消費に直接関わる人々が差異化し、命名している在来の分類単位として使用する<sup>5)</sup>。一方で、形質的な類似性からシモンズらが分類した品種のグループを、「品種群」と表す。有名な品種群として、キャベンディッシュ（Cavendish）やグロスミッCHEL（Gros Michel）、Mysore（AAB）やBluggoe（ABB）などがある。品種群には、その中に多くの変異が含まれるものから、変異が非常に少ないものまである。マンダール地域では、例えばロカ・ティラの低位区分としてロカ・ティラ・マンダール（*loka tila mandar*）があったり、ロカ・バランバンの低位区分としてロカ・バランバン・パッティス（*loka barambang pattiss*）があるなど、さらに細かく見分けられている「品種」もある。

### 3 南スラウェシの農業とバナナ生産

南スラウェシ州は、インドネシアの中で、ジャワとバリに次ぐ農業生産地帯であり、汽水域でのエビや魚の養殖でもインドネシアで一番を誇る。主食生産物の中では、コメが最も多く（2002年の統計で約382万トン）、ついで、トウモロコシ（59万トン）、キャッサバ（52万トン）と続く。バナナは、州外への出荷が少ないせいか統計では重視されず、2001年から2005年には統計の数字もないが、1991年から2000年の10年間の統計の平均で約32万トンの生産がある<sup>6)</sup>。

古川は、南スラウェシを、歴史的な主食作物の違いによって、5つの地域に分類した。米食圏（中央部の平野での稲作を中心とする一大農業地帯）、トウモロコシ圏（南部の少雨でトウモロコシ栽培がさかんな地域）、サゴ圏（ルウ県に属する東北部の低湿地帯。もともとサゴが優越し、最近に入植者によって稲作がさかんになっている）、雑食圏（北部山岳地帯のトラジャの居住地域で、棚田・焼畑・コーヒー栽培を組み合わせた地域）、バナナ圏（北西部のマンダール居住地域で、バナナとココヤシ栽培を中心とした地域）である（古川 1982）。本章では、この分類を踏襲し、地理的位置、農業、地形、居住者の特徴のうち、地域の特徴を最も示していると思われるものを組み合わせて、それぞれを、中部稲作地帯、南部トウモロコシ地帯、北東部入植地帯、トラジャ山岳地帯、マ

ンダールバナナ地帯、と呼び変える（図4）。

反対に、作物の生産統計から生産地を見ると、コメの生産では、中部稲作地帯と、北東部入植地帯が目立って多い。また、トウモロコシの生産では、中部稲作地帯と南部トウモロコシ地帯が2大生産地である（スラウェシ州年度統計 1982-1991; 2001-2002）。つまり、Boneを中心とする中部稲作地帯は、コメのみならず、ほかの主食作物の生産でも最も重要な位置を占める大農業圏で、もともとはサゴが優越していた北東部入植地帯が穀物倉としてあとを追っている。

バナナに関しては、統計の信頼性が低いのが、やはり、BoneとSenkangを中心とする中部稲作地帯の生産性が安定しており、その他、南スラウェシ全体で生産されている。ただし、バナナはコメやトウモロコシに比べて自家消費される割合が高いと考えられるので、統計が自家消費用、または小さなマーケットへの出荷を把握しておらず、相対的に、コメやトウモロコシに比べて生産量が低く見積もられている可能性がある。

## 4 各地の市場と風景

著者は、2002年8月に、州都マカッサルの市場で売られているバナナの品種（図5-a）と出荷地の聞き取り調査をおこない、そこで聞き取られた地域を網羅した南スラウェシのバナナ産地を一筆書きで周り、バナナの流通ルートと、地元のマーケットに売られている品種の調査をした。調査ルートは図1のとおりである。

マカッサルの市場で聞き取られた産地は、多い順にBoneとPalopo（各10店）、Soppeng（7店）、Senkang（6店）、Mamuju（5店）で、その他、マカッサル周辺の各県の地名が多く見られた。ほぼすべての地域からバナナが供給されているが、トラジャ山岳地帯からのバナナのみ聞き取られなかった。

マカッサルから南に向かい、海岸線に沿って南部トウモロコシ地帯を進むと、海沿いにエビの養殖場が続く。エビ養殖が最もさかんな生業のようである。道沿いで見る品種は、2倍体のバナナや、矮小型キャベンディッシュのカップル（*kappal*, AAA）、灰色の果皮をもち早生のバランダ（*balanda*, ABB）など、小振りだったり早く収穫できる品種が多い。この地域からは、マカッサルへの出荷はほとんどなく、小さな街の市場を中心として独自の商圈を持っていた。バナナは、周辺の村からベテペテと呼ばれる小型バスで運ばれるか、あるいは歩いて運ばれて来るといふ。市場には、マカッサルの標準的な品種も揃っていたが、ほとんどこの地域の市場にしか見られない品種が3種あった（図5-b）。ここは南スラウェシの中では降水が少なく不安定な地域なので、そのことと関係あるかもしれない。もしくは、食の中での重要性より、観葉植物としての役割が強く、丈の低い品種が好まれるのかもしれない。しかし、不思議なことに、風景として目立つこの二つの品種は、市場では全く見かけなかった。

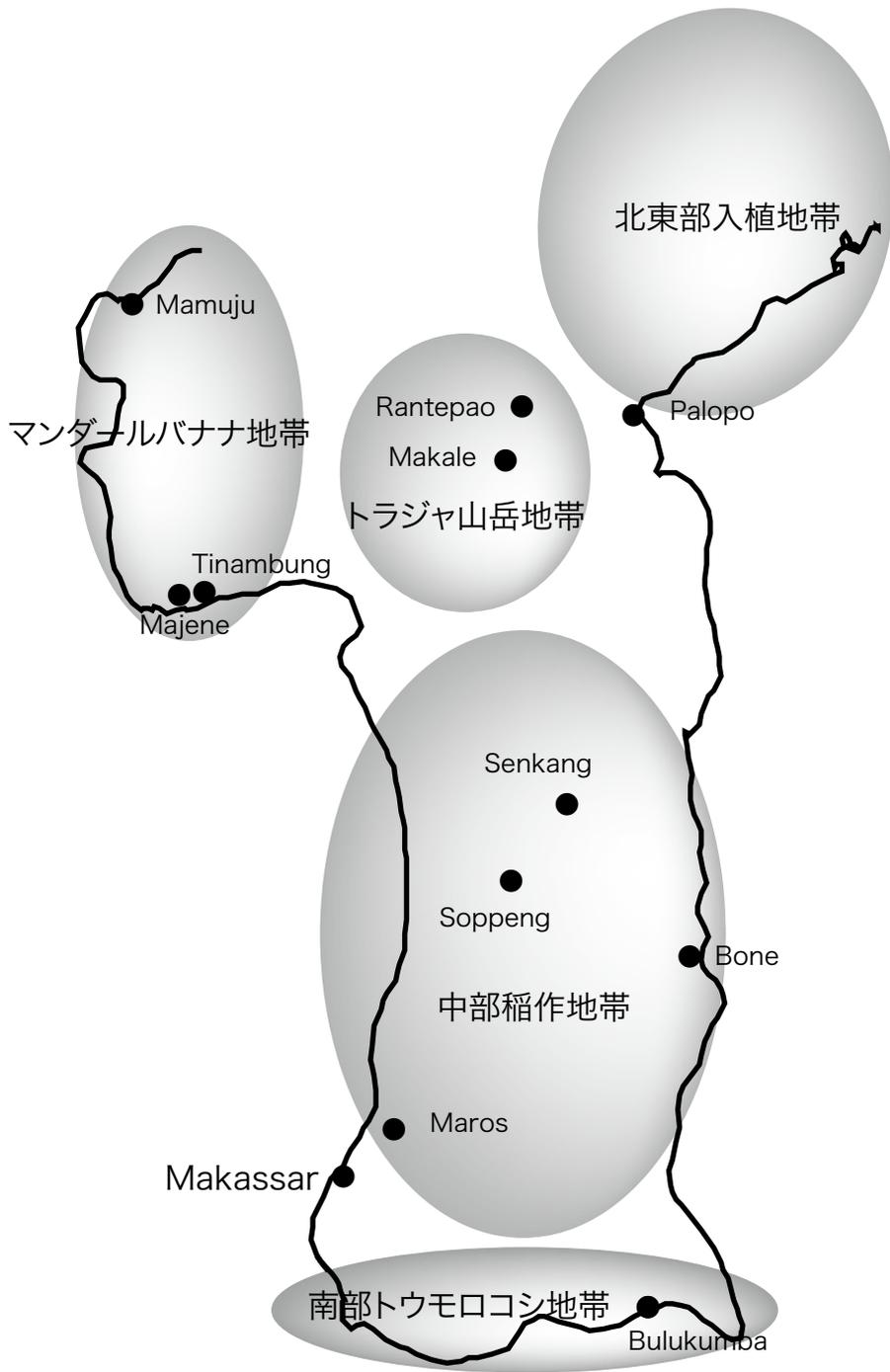


図4 南スラウェシの農業圏

続いて、Bone, Senkang などを中心とする中部稲作地帯に入ると、水田が広がり、多様な商品作物が見られる。水田、ココヤシ、バナナ、カカオ、ロンタルヤシ、クローブなどの混作も多いが、単作の畑もあり、バナナの単作畑も見られた。道端でめずらしい品種を見つけて所有者に尋ねても名前を知らないなど、バナナに対する興味はあまり高くないようであった。畑は、地域によって、ピサン・ケポック（ABB）、ピサン・ラジャ（AAB）、ピサン・スス（AA）、ピサン・ダディ（AA）のうち1、2種が卓越している。この地域には、マカッサルでバナナの産地として挙げられた Bone, Senkang, Soppeng を含む（図5-c, d, e）。これらの市場では、マカッサルの市場の標準的な品種が多かったが、地域によって特に多い品種は異なっていた。また、少量だが、めずらしい品種も見られた。これらの地域からは頻繁にトラックでマカッサルへ出荷される。しかし、トラックは地方都市の市場を通過しない。各生産地から小型トラックなどで集荷され、郊外の町にある集積所に運ばれ、ひとつのトラックには基本的にひとつの品種が積み込まれてマカッサルへ直接出荷される。

北東部入植地帯であるルウ県の入り口、Palopo に近づくと、カカオとバナナとココヤシのマンダールで見慣れた畑が増える。チークの植林も見える。Paolopo の市場には、マカッサルの標準的な品種のほかに、数種類の比較的多く見られる品種があった（図5-f）。北東部入植地域のバナナは、Palopo で集荷されずに、県の中央に近い Mangkutana などの小さな街の集荷場からトラックでまっすぐにマカッサルへ出荷されるのだという。

Palopo から西へ入ると、急峻な山道で、トラジャ山岳地帯に入る。山に登るに連れ、他の地域とは品種がかなり違ってきた。まず、ほかのどの地域でも一番多いピサン・ケポック（ABB）が少ない。その替わり、ピサン・ケポックによく似ているが、花序が全くないプンティ・ブジュという品種があり、これは外の地域に出荷されるときにはピサン・ケポックと呼ばれるという。プンティ・ブジュはルウ県にも多いというが、他の地域ではほとんど見ない。また、平地の地域にはめずらしいプランテンタイプ（AAB）のピサン・タンドックが生えているのが目立つ。この地域の市場では、市場の品種の頻度も他の地域とはずいぶん違っていた（図5-g）。南スラウェシではマイノリティのキリスト教徒であるトラジャは壮麗な葬式で知られるが、近年観光化が進み、コーヒーが名産として知られる。棚田が発達しており、農業景観も他の地域とはかなり違っていた。

トラジャ山岳地帯を南に向かって平地に下り、西に向かうとマンダールの地域である。マンダールの地域は、海岸線に沿って100キロメートル以上続く。前述したように、料理用のロカ・マヌルン（ピサン・ケポック、ABB）とロカ・バランバン（ピサン・ラジャ、AAB）、生食用のロカ・ロカ（ピサン・スス、AA）、ロカ・ティラ（ピサン・アンボン、AAA）とロカ・バランガン（ピサン・バランガン、AAA）がマンダールのどこの地域にもあるが、地域によって特産ともいえる品種がある。西南の岬の突端近

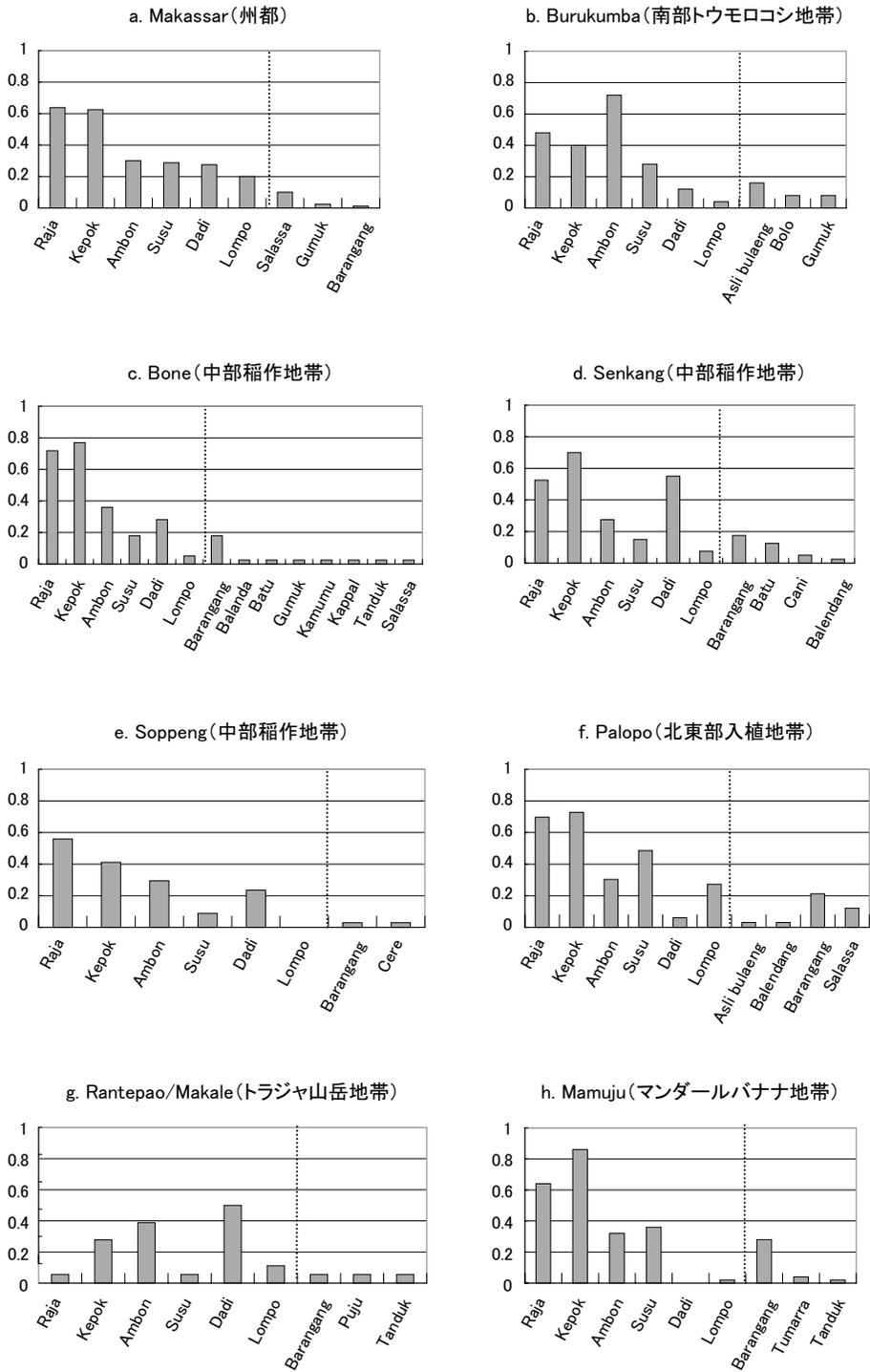


図5 各地の市場の品種 (a-h)  
点線の左側は、マカッサルの標準品種。



写真9 Makaleの定期市



写真10 地方都市市場にバナナを搬入するベテベテ



写真11 Maros の市場



写真12 州都市場にバナナを搬入するトラック

くにあるパンボアン村の特産、生食用で美味しいロカ・ペレ（AAA）や、その北の海岸線沿いにもみ多く見られる種有り品種のロカ・バロウォ（ABB?）、山でのみ見られる数種の料理用プランテンなどがその例である。マンダールの市場全体では13品種が観察される一方、マカッサルへの出荷が多くカリマンタンへも出荷している Mamuju の市場は、ほぼマンダールの基本的な5つの品種で占められていた（図5-h）。

なお、マンダールバナナ地帯と、トラジャ山岳地帯の市場で、少数ながら、中部稲作地帯や北東部入植地帯から入荷したバナナが売られていた。

## 5 バナナの3つの流通ルート

バナナ産地を回って、南スラウェシのバナナの流通ルートは、生産地と消費地との距離に応じて3種類あることがわかった。ここでは、それぞれ、地域市場（local market）、地方都市市場（small urban market）、州都市市場（provincial market）と呼ぶ。

地域市場は、田舎の町や村に見られる、定期市を中心とした市場である。衣類や道具類などの常設店を伴うこともあるが、中心は、週1、2度開かれる生鮮食品の定期市である。マンダールでの調査地の中心であった Tinambung の定期市ではある日、青果を扱う店が大小合わせて233店出店し、そのうち、61店がバナナを扱っていた。果物の売り手は、生産者が持ち込んできたり、ペテペテ（ミニバス）やベチャ（人力車）などで買い付けてきた小規模な小売業者である（写真8）。生産者自身が、自分の畑で穫れたバナナを丸ごと、ひとつ、ふたつ並べて売っていることも多い（写真9）。このような市場では、めずらしい品種が売られていることもある。そのときに収穫され、自家消費されない品種は選別を受けずに市場に運ばれるのだろう。市場での各品種の呼び名は、おおそ統一されているが、売り手によってはその市場での通り名とは違った呼び方をすることもあって、品種名にも多様性が残る。聞き取りの結果、生産地は、ほぼ市場の周辺約15キロ圏内であった。それぞれの市場のあいだの距離と関係があると考えられる。

地方都市市場は、地方の中核都市の中規模市場である。常設店もより多く、定期市の日のみ使われる屋根付きの売り台の数も、地域市場よりずっと多い。生産者が1つの果房だけを土の上において売っているといった光景はあまり見られない。地方都市市場のバナナは、貸し切りのペテペテなどで、周囲の大規模な産地から運ばれてくることが多い（写真10）。これらの市場から、街中のキオスクにも卸されるが、これらの市場から、マカッサルに出荷されることはない。このような市場では、ひとつだけ変わった品種をみかけることは少ない。品種名は、市場の中でおおそ統一されている。

州都市市場は、マカッサルとその周辺の都市の市場である（写真11）。6種のスタンダードな品種以外は、80店舗の中で、4品種が合わせて12例観察されただけで、前述し

たように多様性は低い。これらの品種は、地域市場や地方都市市場を経由せず、スラウェシ各地の有名バナナ産地の郊外にある集積地から直接大型トラックで運ばれてくる。各集積地では、その地域で販売用に生産されている2、3品種のみが集荷される。そして、トラックに積まれるときは、基本的に1台1品種であることが多い(写真12)。トラックからの荷下ろしを観察すると、運ばれてくるバナナはおおよそ大きさなどが統一されており、品種ごとに、一房当たりの値段が決まっていたり、各パンチにマジックで書いてあるハンド数を足していくと値段が算出できるようになっていた。大規模な市場で荷下ろしされたバナナは、ペテペテやベチャで市内の他の市場やキオスクにも運ばれる。品種名は、市場の中では統一されていたが、マカッサルの中でも、市場によっては、すべての品種が全く異なった品種名で呼ばれていた。

## 6 品種名の分布と流通

バナナの品種名は土地ごとに異なる。本章では「品種」ということばを、「栽培や消費に直接関わる人々が差異化し、命名している在来の分類単位として」用いている。地域の品種名の違いの要因にはふたつの可能性がある。ひとつは、そもそも分類の単位が違う場合である。ある地域では、それぞれ別の名称で呼ばれているバナナが、別の地域では、同じ名前と呼ばれていたり、品種を分ける基準が異なる可能性である。もうひとつは、分類基準は同じだが、別の名称で呼ばれている例である。

実際には、多くの地域で、分類の基準は非常に似ていた。ある地域でひとつの品種名で呼ばれる一群のバナナは、他の地域でも同じ一群として命名されていた。例外としては、ピサン・ケボックと大振りのピサン・ロンボが同じ名称(ウンティ・パイナン)と呼ばれていた例が見られた。また、多くの地域でダディ(*dadi*)と呼ばれるピサン・ダディが、スス(*susu*)と呼ばれ、ピサン・ススが他の名称で呼ばれている、分類は同じだが、品種名が表す対象が異なる例もあった。

品種名の下に亜品種があるかどうか、つまり、さらに細かい見分けと命名がなされているかは、地域によって変異があった。マンダールでは、調査期間が長かったこともあるが、市場でも多くの亜品種名が聞き取られた。

それぞれの品種が、どのような異名を持っているかを表にした(表1)。例えば、マカッサルの市場におけるピサン・ラジャは、スラウェシ南部の市場で、13の方名を持っていた。中には、*manis*と*manisi*, *amisi*, *nisi*など、変形と見られる名称もある。二つ以上の名をもつ品種は11あり、多くの品種名をもつのは、マカッサルで標準的な品種である。ユニークなのは最も小振りなピサン・ススで、かわいらしい形態から、短い言葉を重ねた愛称的な名称(*burum-burum*, *dani-dani*, *uni-uni*など)が各地で発達していた。ほとんどの地域に分布している上に方名が多いということは、この品種が古く

表1 バナナ品種の方名

インドネシア語名		方名	インドネシア語名		方名
Susu	13	Bagiya Baweang Bulaeng jawa Borum-borum Dani-dani Dani-lasuna Doni-doni Lasuna Loka Manuku-manuk Putti putti Tello Uni-uni	Kepok	6	Babeyang Bainan Balik Belimbing Manurung Tau
Raja	11	Amisi Balambang Kelapa Lompu Manis Manisi Nisi Pulu Panasa Punu Te'ne	Lompo	5	Bainan Lelo Loppo Tau Tedong
Ambon	7	Buleran La'bu Lankiran Lerang Panjan Tallang Tila	Dadi	4	Dadi kalling Lanssat Susu
			—	4	Gemuk Katingan Nanka Salayar
			Barangang	2	Barangang Dano
			—	2	Asli Bulaeng Rakka
			—	2	Lasse Salassa

から南スラウェシ一带に分布しているということを示すと考えられる。

地域による品種名の違いは、必ずしも民族の主な居住地域に対応していない。南スラウェシは多民族社会なので、地域のエスニシティによって名称が異なるのかと考えたが、実際には、多数派の母語の分布とは必ずしも一致しない。ほとんどの地域で多民族が混在しており、多くの市場は多民族が共有する場であった。地方都市市場では、ほぼ品種名が統一されていたが、市場での売買の便宜のためという印象を受けた。飛び地のように、離れた地域で同じ名称で呼ばれる品種もあり、ピサン・ダディとピサン・ススのように名称が入れ替わる例もあり、品種名の分布がどのような要素によって決まるのかはまだわからない。

亜品種名は、地域市場ではそのまま用いられることがあるが、地方都市市場や州都市

場に運ばれるときには、品種ごとに分類され、それ以下の分類は意味を失う。また、標準的な品種に似たまとまりは、標準的な品種に組み込まれることがある。トラジャ山岳地帯で見た、雄花序のない品種、プンティ・プジュが、域外に出荷されるときには、ピサン・ケボックになるのがこの例だ。また、村単位、もしくは生産者が勝手につけている品種名は、トラックに積まれる段階で、地方都市市場の、もしくは州都市市場の標準名に変換される。

## 7 商品化と品種多様性

南スラウェシのバナナ市場では、導入された特定の商業用品種が存在するわけではなく、各種の在来バナナが商品となっている。いわば、在来品種の商品化である。在来性はこちらでは、ある地域の中で、「自分たちの固有の」と認識される程度の期間、文化的に共有されてきた家畜、または作物のことを指す（小松 2007）。

流通ルートは3種類あり、それぞれが、地域市場、地方都市市場、州都市市場に向けて出荷される。各地のバナナ栽培農家の市場への依存度は、自家用バナナの余剰を小規模に地域市場へ出荷する農家から、地方都市市場や州都市市場に向けた出荷を主目的として栽培する農家までさまざまなレベルがある。稲作を中心にインドネシアの中でも屈指の農業地域である、Bone、Senkang などの中部稲作地帯では、市場への依存度が高い。このような地域では、道路から見えるバナナは、マカッサルの市場で標準的な品種が多い。一方、マカッサルへの出荷が少ないトラジャ山岳地帯や、南部トウモロコシ地帯では、マカッサルの市場とは異なる品種が多く見られた。バナナの商品化の程度、消費地への距離と消費地の市場の規模が、その地域で栽培される品種の選択に影響を与えている。

作物の流通のレベルとしては、これらの市場に加えて、南スラウェシのバナナでは少ないが、州外市場（state market）、国際市場（international market）が想定できる。南スラウェシでも、マムジュからカリマンタンへ、マカッサルからジャワへという州外市場への出荷もあるという。

バナナの国際市場では、輸出用バナナは、単一品種がバナナ専用プランテーションで栽培され、熱帯地域から温帯地域へと輸出されてきた。20世紀の前半はグロス・ミツェル、20世紀後半以降はキャベンディッシュが市場をほぼ独占してきた。国際市場では、生産する多国籍企業と、各国政府の政策、WTOなどが方針を決定し、土地生産性、労働生産性、肥料への反応性、病虫害への耐性、栽培・流通管理の容易さなどから選択した独占的な品種を栽培させてきたのである（鶴見 1982; 北西 2007）。ほかに、栽培する品種の減少には、地方政府や研究機関の関与が関係している例もある（小松ほか 2006）。

一方、自給用バナナの栽培地域では、世界中で在来品種の多様性について多くの報告

がある（丸尾 2002; 四方 2004; 佐藤 2004; 小松ほか 2006）。バナナが在来作物として栽培されているアジア、アフリカの各地域では、混作、ホームガーデンでの栽培、粗放的な管理、擬人化、植物体の細かい命名、品種の多様性、利用の多様性、象徴的な意味づけなどの文化の共通点が見られる。バナナに与えられる象徴性は、豊穡と生命力である（Hanawa *et al.* 2005）。

南スラウェシの例は、在来品種が商品化されたときに起こる、流通過程での品種の多様性の減少を表している。多国籍企業によって管理されたプランテーションでなくとも、生産地と消費地が地理的、心理的に遠くなるにしたがって、流通するバナナは規格化される傾向がある。

南スラウェシでは、規格化は、いくつかの方法で行われる。ひとつは、品種の選択である。都市の消費者にもっともなじみのある、売れ残りのリスクのない品種が選ばれる。卸売り時の管理のしやすさから、ひとつのトラックにひとつの品種が積み込まれることも品種が限定されることに影響しているだろう。もうひとつは、流通の過程での品種名の変換である。地域では品種のサブカテゴリーとして見分けられていたバナナや、別の品種として命名されていたバナナが、生産地の集荷場に集められ、出荷される段階で、マカッサルで標準的な品種名で一括して命名し直される。また、マカッサルの市場の荷下ろしで見られた果掌の数で値段が決まるというシステムは、形状や品質が一定であることを期待して成り立っている。

これらの規格化は、消費者が、バナナに対する分類や利用の知識を生産者と共有している程度に比例していると考えられる。バナナの品種の多様性を支えているのは、作物としてのバナナに注意を払い、見分け、変異を楽しんできた生産者だけでなく、その文化を共有する消費者の存在である。

商品化がより進んだフィリピンで最近見られているのは、マニラのスーパーマーケットで、在来のバナナに対して、規格化され、きれいにラッピングされたキャベンディッシュに高値が付けられ、中産階級に売れる現象だという（北西功一 私信）。商品化の次は大量生産品のブランド化である。そして、その次に来るのは、在来の品種が、その希少性で価値を生む、差異化であろう。

主食作物など、人口増加に対応した生産量の増加が最重要課題である作物は、品種多様性の減少が著しいが、バナナのような、主食としての役割は担っていない作物の品種多様性もまた、商品化の程度と消費地との距離、消費文化の情報化に大きな影響を受けている。多様性を守るのは、生産地でも消費される流通ルートの確保と、都市圏の消費者との文化の共有であろう。

## 謝 辞

本研究は日本学術振興会・熱帯生物資源研究基金と日産科学振興財団・日産学術研究助成より研究助成を受けておこなわれた。マカッサルのハサスディン大学では R. A. Radi 学長、開発および協力担当副学長 S. W. Wahid 教授に調査の便宜を図っていただいた。講師の A. Amri 氏、P. Totok 氏と同僚の方たちには、南スラウェシ州の統計の入手にご尽力いただいた。Tinambung で毎回ホームステイをさせていただいた Dartiya 一家およびその親族や友人の方々には調査の手伝いをしていただくとともに、様々なマンダール料理をごちそうになった。京都大学東南アジア研究所の濱元聡子さんには、スラウェシでさまざまな情報と宿を提供していただいた。京都大学地域研究統合情報センター長の田中耕司教授には調査地選びについて助言をいただくとともに、インドネシアの多くの方々を紹介していただいた。ガイドの Uddin さんは、通訳、調査助手、インフォーマントとして調査のパートナーになっていただいた。バナナについての多くの考えは、「バナナの足」研究会の仲間たち、塙狼星さん、北西功一さん、丸尾聡さん、四方篝さん、佐藤靖明さんとの議論によって生まれた。これらの方々には心から感謝申し上げたい。

## 注

- 1) 2004年に南スラウェシ州から分離した。1999, 2000, 2002年の調査当時は、南スラウェシ州の一部だった。
- 2) マンダールのバナナ文化については北西ほか(2000)参照。2000年の二度目の調査の結果が小松ほか(2006)で補足されている。
- 3) スラウェシ島は、kの形をした島で、南スラウェシは左下の棒にあたる。北スラウェシ、中央スラウェシ、東南スラウェシなどそれぞれの地域は、歴史的な繋がりが薄く、商業圏も異なっている。
- 4) バナナの種とゲノムタイプ、品種群名の使用法は研究者や論文によって異なっている。本稿では、種とゲノムタイプの記述に関しては、シモンズら(Stover and Simmonds 1987)にならってゲノムタイプで記述する。交雑系統は *Musa paradisiaca* と記述されることもある(Valmayor *et al.* 2000)。アクミナータ2倍体、3倍体とABのバナナは生食用に、AB以外のパルピシアーナとの交雑タイプは料理用に用いられることが多いが、地域によって変異がある。タンザニア、ウガンダなどのアフリカ大湖地帯では、主食調理用バナナのほとんどが、アクミナータ3倍体である。
- 5) 「種」「品種」は非常に不明確な単位である。植物の「種」は、類縁の深い(同系の遺伝子をもつ)個体を一括した分類学上の基本単位であるが、どの範囲までを類縁が深いと判断するかは、最終的には研究者に委ねられる(中村 1991)。また、「品種」という概念が「種」の下位区分であることは明確であるが、ヒト-植物関係の中で成立してきたものであり、一概に定義することが困難な概念である(重田 1995)。
- 6) スラウェシのバナナに関する統計は、年ごとの変化が大きすぎて信用性に欠ける。南スラウェシ州の統計では、1991年から2000年のあいだに、10万トンから70万トンまでの差がある。

## 文 献

De Langhe, E. & P. De Maret

- 1999 Tracking the banana: its significance in early agriculture. In Gosden, C. C. & J. Hather (eds.) *The Prehistory of Food: Appetites for Change*, pp. 377-396. London: Routledge.

古川久雄

- 1982 「南スラウェシの稲作景観」『東南アジア研究』20(1): 23-46。  
1996 「南・東南スラウェシの沿岸村落」『東南アジア研究』34(2): 438-468。

Hanawa, R., K. Kitanishi, K. Komatsu and S. Maruo

- 2005 An Essay on the Culture of Banana Cultivation. In Matsui, T. and S. Aungsumalin (eds.) *Multiply Useful Plants: Uses and Usefulness*, pp. 75-93. Tokyo: Research Institute for Language and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

北西功一

- 2007 「バナナ産業と多国籍企業(1)―1990年から2006年におけるバナナ産業構造の変化とキーエータの対応」『山口大学教育学部研究論叢』57(1): 47-65。

北西功一・埜狼星・小松かおり・丸尾聡

- 2000 「インドネシアにおけるバナナ文化の予備的報告―スラウェシ島のマンダールとジャワ島のスンダの比較から」『山口大学教育学部研究論叢』50(1): 29-48。

小松かおり

- 2007 「在来家畜の商品化―沖縄在来豚『アグー』の復活」河合香史編『生きる場の人類学―土地と自然の認識・実践・表象過程』pp. 365-385, 京都: 京都大学学術出版会。

小松かおり・北西功一・丸尾聡・埜 狼星

- 2006 「バナナ栽培文化のアジア・アフリカ地域間比較―品種多様性をめぐって」『アジア・アフリカ地域研究』6(1): 77-119。

丸尾 聡

- 2002 「アフリカ大湖地帯におけるバナナ農耕とその集約性―タンザニア北西部・ハヤの事例」『農耕の技術と文化』25: 108-134。

中村武久

- 1991 『バナナ学入門』東京: 丸善。

中尾佐助

- 1966 『栽培植物と農耕の起源』東京: 岩波書店。

佐藤靖明

- 2004 「人とバナナが織りなす生活世界―ウガンダ中部ブガンダ地域におけるバナナの栽培と利用」『ビオストーリー』2: 106-121。

重田真義

- 1995 「品種の創造と維持をめぐるヒト―植物関係」福井勝義編『自然と人間の共生(講座地球に生きる4)』pp. 143-164, 東京: 雄山閣。

四方 篝

- 2004 「二次林におけるプランテインの持続的生産―カメルーン東南部の熱帯雨林地帯における焼畑農耕システム」『アジア・アフリカ地域研究』4(1): 4-35。

Stover, R. H. and N. W. Simmonds

1987 *Bananas* (3rd edition). Harlow and New York: Longman.

鶴見良行

1982 『バナナと日本人』東京：岩波書店。

Valmayor, R. V., S. H. Jamaluddin, B. Silayoi, S. Kusumo, L. D. Danh, O. C. Pascua and R. R. C. Espino

2000 *Banana Cultivar Names and Synonyms in Southeast Asia*. Rome: International Plant Genetic Resources Institute.

統計資料

スラウェシ州年度統計 Statistics of Sulawesi Barat Province. 1982-1991, 2001-2002.